

## 【 田鎖 76 年式速記法について 】

田鎖 76 年式は、日本語速記法の始祖「田鎖綱紀」より「田鎖一」「田鎖源一」へと3代続いた日本語速記創業家の帰結点であるとも言えよう。綱紀の弟子の若林珪蔵らが研究改良の末、実用化を果たしていったところの「田鎖式」とは系統の根は同じであっても、創業家がたどっていった研究は随分と異なっている。その速記符号体系は、「より多くの人々の個人生活における日常の道具としての速記法」たらんとした感がある。

この 76 年式の速記符号は、複画方式、折衷方式、単画方式といった分類にあつては折衷方式に属するものであり、その線量、画数は比較的多目なところもある。50 音基礎符号に関して言えば、ア列～オ列に至る各列符号に各列の特徴づけが田鎖家独特の手法ではっきりとなされている点でも、綱紀に始まる速記法研究のこだわりが見てとれるようで興味深い。

これら 50 音基礎符号の中には、単画符号のほかに、末尾小楕円のついた複画符号、線頭や線尾に小フックのついた符号が混在する。速記符号を連続する際、前後のつながりによっては離筆を伴わざるを得ない形状の符号が出たりもするのだが、そのこと自体、書かれた符号の属する列の特定に寄与するという意味では、あながち不都合で不利だとすることはできない点でもある。

また、速記方式としての 76 年式の全体像を他方式と比較、検討すればするほど、多くの方式で行なわれている方法とはいささか異なる独特な速記法運用体系ともなっていることが散見される。甚だ興味深くして奥深さを感じる部分でもある。

ちなみに、この方式で日本速記協会の速記検定1級の速度をコンスタントに書くことができるだろうかなどと、長年思いを巡らしてもきた。市販されたテキストの内容そのままの書き方でストレートにクリアするのはかなりの困難を伴うかもしれないが、例えばこの速記法体系から忠実に逸脱しない形であっても、高速度体系の多少の肉づけをすれば十分にクリアし得るものと思われる。何せ「幾何派」の速記法である。分速 320 字程度の速度は必ずやクリアするキャパを 76 年式は有していると見る。

なお、この方式の速記符号には、日本語を漢字仮名まじり文で書いているような趣がどこかある。例えが飛躍しているように思われるかもしれない。速記法におけるいわゆる「略字」であるが、普通文字で書いた文章中の「漢字」の部分にこの略字部分が近いような感があるのだ。他方式の略字のそれもどこか「漢字」の部分に近いような感があるものだが、76年式の場合、それが顕著なのだ。「動詞、名詞、形容詞、代名詞、副詞、接続詞」などに多く略字が設定されているわけだが、特に「動詞、形容詞」をあらわす速記符号が「音と意味」に直結している感覚を強くもたらすものとなっている。極端な言い方をすれば、書き手が「音と意味」の両方をイメージして速記符号を脳内で「想起」した上で書きつづっていくような感覚が常に伴うとも言おうか。

どのような意図でこういったまとまりをつけていったのかということについて、田鎖家の意図の有無、いや意図は「有った」という前提に立ってこの76年式という方式を見てきたが、その後、きょうに至るまで、どのような意図であったかを解明できないでいる。76年式の速記符号を操る中で感得していくしかないことではある。

それにつけても興味深い方式である。

(2018年5月14日 平野明人)